

(1) 5,500,000 2018年5月12日刊行

日本で550万人と言えば、兵庫県の人口ほどである。世界一高い山であるエベレストを抱くヒマラヤ山脈。インド北西部でそのヒマラヤの南にある盆地に、ジャンムー・カシミール（JK）州の夏の州都スリナガル市はある。カシミール語は、スリナガル市を含むJK州北西部などで、約550万の人々によって話されている。

JK州ではインドからの独立運動が続いている。2016年7月に、反政府武装グループ「ヒズブル・ムジャヒディン」の若きリーダーであったブルハン・ワニが、治安部隊によって殺害されて以降、市民と軍警察との間の抗争は激化している。

我々研究者は、数カ月前から計画を立てて調査に出る。16年8月から1カ月間、初のスリナガルでの言語調査を予定していた私は、状況を懸念しつつ、現地へ向かった。結果、ブルハンの死後すぐに発令された外出禁止令がだらだらと続き、半月もの間、滞在先の宿から外出できないという憂き目に。翌年の調査時も政情は回復せず、突発的な衝突が街のあちこちで起こり、イスラム教徒が重んじている金曜日の礼拝をさせまいと、軍警察が街一番のモスクを毎週金曜日に封鎖したりもしていた。

ただ、平和に言語の研究をしたいだけなのにな。



「ブルハンはまだ俺たちの中に生きてるぞ！」という落書き＝インド北西部スリナガル市で2017年7月、筆者撮影

(2) 100,000 2018年5月19日刊行

日本で10万人と言え、日本「チロル」のある長野県飯田市の人口ほどである。世界2位の高さの山であるK2を抱えたカラコルム山脈。その山脈内、パキスタン北東部のギルギット・バルティスタン州に、フンザとナゲルという二つの谷がある。それらの谷を中心に、ブルジョ人など、約10万の人々によってブルシャスキー語という言語は話されている。

フンザ谷の名を、耳にしたことのある人もいないだろうか。二つ名が幾つもあり、世界三大長寿の里、風の谷、桃源郷などと呼ばれる。A・アシモフの雑学コレクションでは「癌のない地域」としても紹介されている。今は下火だが、日本人バックパッカーの間で聖地として流行した時期もある。

ブルシャスキー語話者は全員がイスラム教徒であるが、ナゲル谷の住民が皆シーア(12イマーム)派である一方、フンザ谷の人々はほとんどがイスマーイール(ニザール)派である。かつて「暗殺教団」として名を馳せたこの宗派は、今ではラマザン月の断食も日々の礼拝もせず、モスクも持たない。

7000メートル超の山々に囲まれ、日夜問わず川の流れる音ばかりが聞こえて来る長閑な村。

平和過ぎると、研究に専念していて気後れするな。



パキスタン北東部フンザ谷アルティト村の遠景 = 2014年8月、筆者撮影

日本で3万人と言え、高忍日売神社で有名な、愛媛県伊予郡松前町の人口ほどである。ヒマラヤ、カラコルムの山々を除いて世界で最も高い山、ティリチ・ミール峰を擁する、ヒンズークシ山脈。その山奥にカタ人は生きる。彼らは主にアフガニスタンのヌーリスタン州に暮らす、パキスタンのカイバル・パクトウンクワー（KP）州にも僅かに集落がある。その内の約3万人が話す彼らの民族語がカティ語である。

カタ人をはじめ、この地域には、かつて独自の多神教を信仰していた幾つかの民族が暮らす。故に、昔は「カーフィリスタン（異教徒の地）」と呼ばれていたが、19世紀末のイスラム強制改宗後に「ヌーリスタン（光の地）」と改められた。

私のカティ語の調査地はKP州のコニシト村だ。村への道は未舗装で、カタ人は馬で移動する。この村ではアフガニスタンの国技でもある「ブズカシ」（ヤギなどを奪い合う騎馬スポーツ）が盛んだ。

アフガニスタンが近いということで、外国人は近年、警察官を24時間、同伴させねば入域できない。警護という名目だが、実際は監視目的だ。狼藉を働く気など元よりないが、自由に行動できないとなると、居心地が悪くて参ってしまう。

ただの平和な山村なのだがな。



ブズカシに興じるカタ人たち。首とひづめを切った羊を用いている＝パキスタン・コニシト村で2016年11月、筆者撮影

100人。もう、何かに例える必要もない数字であろう。世界2位の高さの山脈であるカラコルム。パキスタン北東部カラコルム内でブルシャスキー語を話す人々の中、別の言葉を持っている民族がいるとの噂を聞いた。その民族の名は、ドマ人。多くは数世帯ずつ、周辺の大きな民族の集落に分散して暮らしているが、私が調べた限りではたった二つ、ドマ人だけで暮らしている集落もある。そして、その二つの集落で一部の人だけが残しているのが、彼らの民族語、ドマーキ語である。もはや、流暢な話者は100人、いやその半分もないかも知れない。

ドマ人は音楽と鍛冶の職能集団である。周辺地域の少数民族から、祭日や結婚式などに呼ばれて音楽演奏を担う。農閑期の冬には、上に述べたドマ人の集落から男性がこぞって消える。近隣の大きな町などへ、集団で出稼ぎに出てしまうからだ。

ドマーキ語は今後、数十年で消滅するだろう。子供らは乏しい単語しか知らないし、大人でも自由な作文ができない者が多い。村内でも皆、ブルシャスキー語を日用していて、ドマーキ語での自然発話は稀有だ。物語を知っている者は僅かで、諺や比喩の類は既に失われてしまった。

それが彼らの選択なのだから、しかたがないな。



演奏の練習を、道端で見せてくれたドマ人たち=パキスタン・モミナバード村で2014年8月、筆者撮影